

Richard Cross

*The Physics of Duns Scotus*— *The Scientific Context of a Theological Vision*

Clarendon Press Oxford, 1998, pp.XV+303

川 添 信 介

ドゥンス・スコトゥスとは、いったい何者だったのだろうか。私はこの問いにまともな答えを持っていないことを正直に告白しなければならない。もちろん、それは私がスコトゥスのテキストそのものを読み込んでいないためであろう。こんな場所に評者としてしゃしゃり出てくることは、本来許されることではない。しかし、一方で私はこのCrossの最初の著作の書評をよろこんで引き受けた。それは、なぜか。それはこの書のタイトルのせいである。「スコトゥスの自然学」？ たしかに、アンソロジーだが *Duns Scotus, Metaphysician* というタイトルの書物 (W.A. Frank and A.B. Wolter, Purdue UP, 1995) は知っているが、自然学を扱った類書など見たこともない。スコトゥスは「存在の一義性」の哲学者ではなかったのか。あるいは、*possibilitas* という様相と神の創造における自由に新たな概念を導入した神学者ではなかったのか。この書物の翌年に公開されたCrossの第二の著作 *Duns Scotus (Great Medieval Thinkers, OUP, 1999)* は、スコトゥスの思想全体についてきわめて要領よく整理したものだと思われるが、その中に「スコトゥスの自然学」と題された章が設けられているのでもない。

そして、その副題からも推測されるように、本書は決して科学史研究の書物ではないのである。そのPrefaceでは、本書がスコトゥスのキリスト論に関する著者の博士論文の副産物である旨が述べられている。しかし、ここでは神学固有の主題にはほとんど触れられない。その意味で「自然学」なのである。そして、ここで論じられている自然学は、物質的世界をそれを超えた原理によって説明しないという意味での「自然の哲学」、あるいはむしろ「自然の形而上学」と呼ぶべきものとして設定されているように思われる。

では、中身を簡単に紹介してみよう。本書全体を導いているのは、「部分と全体」の関係、あるいは「さまざまな種類の一性 unitas」の区別であると言ってよい。スコトゥスは一性を、unitas aggregationis, u. ordinis, u. accidentalis, u. substantialis, u. simplicitatis, identitas formalis に区別し (*Ordinatio* I,1.2.1-4, n.403, Vatican ed., II, pp.356-67) の六つと、unitas homogeneitatis (*Lectura*, I,17.2.4, n.226, Vatican ed., XVII, p.253) とに区別しているとされる。この最初の六つの一性が本書の 2 章から 7 章までで論じられ、残りの章が最後の一性を論じる。つまり、前者が何らかの構造化された物体において全体と部分がどのような関係と一性を持っているのが考察されるのに対して、後者はその部分が「ただ単に extension によってのみ区別される」ような連続性 continua が考察の対象とされる。

比較的短い序論である第 1 章に続く第 2 章「第一質料」、第 3 章「実体形相」、第 4 章「形相の多数性」、第 5 章「複合実体」が一連のものであることは見やすい。この部分で著者は上記のさまざまな一性の区別を用いながら、アリストテレスの形相質料論と現実態・可能態の区別が、スコトゥスにおいて位置づけられているのかを明瞭に示す。すなわち、質料に単なる可能性ではなくそれ自体が何らかの本質をもつものと捉える立場、個体における形相と質料の関係、種子的原理 (rationes seminales) への反論、トマス・アクィナスとガンのヘンリクススの形相の多数性に関する立場へのスコトゥスの反論、質料の実体をその構成要素のどれかや要素間の関係に還元しようとする立場の批判、などが周到に論じられる。第 6 章「付帯性と付帯的一性」では、付帯性が実体とは切り離された仕方では個体化されうるというスコトゥスの立場が記述されている。

続く第 7 章「量と連続性」は、第 8 章からの同質性による一性の媒介となる部分である。ここではスコトゥスが、原子論的な物体理解 (ロマーヌスの立場とされる) に強く反対し、連続体が幾何学的にだけでなく物理的に無限に分割可能であるという立場を保持していたとされている。「連続性の形而上学」と題された第 8 章から、H-unity と略称される同質的な部分からなる連続性についての、スコトゥスの自然学的立場が論じられる。これは例えば水溜りのような一性を保持している存在のことであるが、このような事物の諸部分がすべて現実態にあること、しかも、その一性を保った全体がその諸部分や諸部分の混合体 (aggregatum) とは数的に区別されるといったスコトゥスの理論が分析され、この箇所ではかなりの批判もなされる。

このような同質的諸部分からなる連続体には、その諸部分を同時にみつ非時間的な存在と何らかの推移をもつものが区別されるが、前者が第9章から第11章で扱われ、後者が第12と13章で検討される。第9章「量-変化と質量」では実質的は物体の濃密化と希薄化という、同質的部分の加減に帰される事態が論じられる。この量にかかわる変化の特質を明確にしていることが評価され、Crossはスコトゥスのこの点での説明がニュートン的な質量概念の端緒となっているとみなしている。「質—世、度、変化」と題された第10章の論点は、色の濃さなどの質のもつ度 (degree) の変化をどのように捉えるかである。ここではフォンテーヌのゴデフリドゥス、ウォルター・バーレー、トマス・アクィナス、ヘンリクスなどの理論の紹介とスコトゥスの反論を紹介した後、H-unityとしての質の加減として度というものが捉えられており、これが質の変化を量的に把握するという歴史的に新たな見方であると評価される。第11章「場所と空間」では、聖体におけるキリストの現前にかかわるテキストから、囲む物体全体と囲まれる物体全体との関係としての ubiety と、それらの諸部分の関係としての position の相違の提示が、さらに空虚の存在可能性の承認、空間の不動性の主張のためのスコトゥスの議論が吟味される。

もう一つの種類の連続体とは時間と運動であるが、第12章「運動、時間、連続性」では運動の限界をどのようにして決定できるかという問いや、瞬間をどのように捉えるのかが論じられる。そこでの解釈の要点は、スコトゥスは時間というものを運動の還元可能であるとする「様相的還元主義」を採っているということであろう。最後の第13章は「時間の実存性」と題され、ここでの中心枠組は「流れる時」と「静的な時」(McTaggartの A-series time と B-series time) の区別であり、スコトゥスが「流れる時」が時にとって本質的であるかのように語っているのに、実はその実存性について否定的だというように認定されている。

以上の拙劣な紹介からは読み取りがたいであろうが、本書のスタイルは実に明快である。一方でテキストの広範な読みにもとづくものであることは、疑い得ない。その意味で本書はスコトゥスのこの分野については（私にとってだけでなく）未開拓であるといつてよいであろうから、これだけでも十分に有益な書物である。しかし同時に、この姿勢は決して単に受身的なものだいうわけではない。テキストを翻訳してそれを逐語的に解説するといった手法ではなく、さまざまな箇所散在しているテキストから

スコトゥスの理論の論理的構造を一貫した形で明瞭に取り出そうとする（多少煩瑣なほどの、しかもやや外挿的な印象のある）分析哲学的な手法がとられている。冒頭に述べたように、この Cross の手法がスコトゥス自身の本当の理論（そのようなものを取り出せるとして）に見合ったものなのかどうかを評価することは私にはできない。しかし、将来反論がなされる時期が来ても、反論を出しやすい明瞭なプレゼンテーションであることは間違いがなく、私は好ましいと考える。また、スコトゥスの理論の再構成において、ほとんど常にアクィナスやヘンリクスらの立場との比較がなされており、その意味で哲学的にスコトゥスの特徴を取り出そうとしている。この点は、スコトゥスの研究者だけでなく、周辺の哲学者を専門とする研究者にとっても有益なものである。さらには、質料概念や空間概念に関して上記に紹介したように、科学史的に中世にアプローチしている研究者にとっても、新たな発見として見いだせる内容を含んでいる（と少なくとも著者は述べる）点でも、興味深いものであろう。

さてこの読書によって、スコトゥスとは何者であったのかという問いに答えが見つかったのであろうか。少なくとも、本誌第43号で鈴木泉氏が書評をされた O. Boulnois が提示するような「存在神論的」形而上学者スコトゥスは、本書には少しも姿をあらわさない。自然科学者としての、しかも後の科学史上の系脈と接続するような自然科学者としてのスコトゥスと Boulnois のスコトゥスはどのように関連しているのだろうか。悩みはいつそう深まったと言うべきかもしれない。さらに、本書は冒頭で示唆したように、パラドキシカルな面をも持っている。スコトゥスの自然学を自然学として取り出すことが意図され一定の成果を提示しているのであるが、その副題は「神学上の展望」とかかわる科学的文脈における自然学でもあることが表明されているのである。その内容の紹介でも一部述べておいたように、自然科学上の理論を取り出すために用いられているテキストの大部分は、形而上学を飛び越えて、啓示と秘蹟にかかわる純粋に神学的論点を論じたテキストなのである。ところがまた、本書の議論を当然前提して書かれたと予想される Cross の最近の著作は「受肉の形而上学」(*The Metaphysics of the Incarnation*, OUP, 2002) と題されているのである（評者は未読であるが、スコトゥスだけでなく、13-14世紀の主要な神学者が主題とされている）。自然科学と形而上学と神学、この三者の関連を Cross はどのように捉えているのだろうか。本書でも他の著作でもこの点は十分に考え抜かれているようには思えない。しかし、すぐに *Duns Scotus on God* (Ashgate) の刊行も予告されており、Cross はス

コトゥスとは何者であったのかという問いを抱えている者にとっては、しばらく目の離せない研究者であることは間違いないと思う。

---

*Nicholas of Cusa. A Medieval Thinker for the Modern Age*

Edited by Kazuhiko Yamaki

(Waseda/Curzon International Series)

Richmond, Surrey 2002, XIV + 288 S.

Hans Gerhard Senger

Zum Auftakt des Cusanusjahrs 2001, in dem vielerorts weltweit des 600. Geburtsjahrs des Nikolaus von Kues (nachfolgend NvK) gedacht wurde, veranstaltete in Verbindung mit der Japanischen Cusanus-Gesellschaft eine Forschergruppe der Waseda Universität, Tokyo, dort vom 6. bis 8. Oktober 2000 eine internationale Cusanustagung mit Teilnehmern aus sieben Ländern. Sie stand unter dem Thema *Nicholas of Cusa – A Medieval Thinker for the Modern Age* und mit dem frühen Datum am Beginn eines stattlichen Kongress- und Ausstellungsreigens, der dann über Italien (Villa Vigoni/Comer See) und Deutschland (Bernkastel-Kues, Trier, Koblenz) nach den Niederlanden (Deventer) und U.S.A. (Washington D.C.), nach Portugal und Spanien (Coïmbra und Salamanca), noch einmal nach Italien (Brixen/Bressanone) und schliesslich nach Argentinien (Buenos Aires), Frankreich (Tours) und Tschechien (Olmütz) führte. Von den grossen Lebensstationen und Wirkungsstätten fehlte also nur Rom.

Auch mit ihrem Anfang 2002 erschienenen Tagungsband führt die japanische Cusanusforschung die Reihe der noch zu erwartenden Kongressakten an, an denen er sich demnächst messen können wird. Er enthält alle Referate und ausserdem noch einige andere Beiträge, insgesamt 25, alle in einer der drei europäischen Kongresssprachen abgedruckt, einige in Französisch, mehr in Englisch, überwiegend in Deutsch (ein heute bereits erwähnenswertes Ereignis). Obwohl natürlich